

愛知県東栄町の石造文化財を中心として

石の仏に見る隠された顔

— 愛知県東栄町の石造文化財を中心として —

石仏のイコノロジー③

- 1 東栄の特殊石造物
- 2 特殊石造物から考える
- 3 特殊石造物の中
- 4 特殊石造物の分布
- 5 今後の課題

1 東栄の特殊石造物

愛知県東栄町古戸地区には興味深い石造物がある。国道151号線から津具に抜ける県道を約1キロ弱進むと曹洞宗の普光寺と言うお寺の脇にでる。このお寺の東脇は卵塔場とも呼ばれ、崖の上のほうには石仏などを見ることが出来た。しかし、時折、石などと一緒に石仏の一部などが落ちてきたことから平成24年の夏ごろに、寺の総代たちが不安定な石仏などを道路脇に下し、整備したという。崖の上のほうから下ろされたものは地藏、観音、役の行者などの他にも三界萬霊の供養碑、卵塔形の墓も見ることが出来る。ただ、石仏の中には首と胴体が据え変わっているものがあり気になるところである。東栄町では、すでに昭和54年に町内の石仏の調査を行い『東栄の石仏』^①としてまとめ上げている。当時としては地域ごとに、可能な限りに年代を読み取っての

労作である。町の文化財審議委員会では、石造物を基本的に馬頭観音、地藏、不動明王、行者、庚申塔、道祖神など17種類に分類し、年号がわかるものは年号が付されている。ただ、それら石造物の着衣および手にしている仏具、意匠についての記述などはない。興味深いのは特殊な墓碑という項目が立てられていることである。しかも、東栄町地内に39を数えるところ。これは、『信濃のキリシタン研究』^②に示されているキリシタンの墓と言われるものの図と変らない。これらは、長野県松代町、長明寺、長国寺、西念寺、さらには追分宿のものであると記されているが、この追分宿は

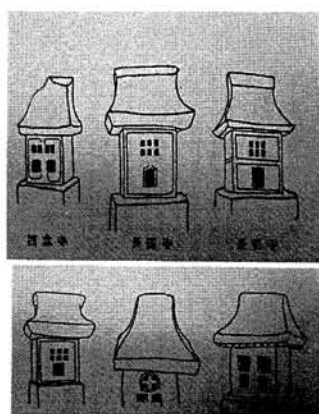


図=②
『東栄の石仏』より
(図-129 足込地区)



図=①
東栄の石仏 (図126
足込地区)

春日井 眞 英



図=③
『信濃キリシタン研究』より
下は追分の宿(47頁)

北国街道と中仙道の分岐点でもあり交通の要衝であった。さらにこの地には、吉野太夫と呼ばれるキリシタンの遊女が居たという。吉野太夫はキリシタンであったことが露見して処刑されるが、この地の古寺泉洞寺の慶応四年の宗門帳によると、この寺に埋葬されたもの大半は遊女であったと云い、尾張出身者が多かったと云う。この事例は人の移動を考える上で大いに示唆を与えてくれる。

ところで、なぜわざわざ信濃を取り上げるのかを説明しなくてはならない。それは、愛知県北設楽郡、および天竜川流域の地理的特性が関連してくる。現在の国道151号線は別名別所街道と呼ばれ豊橋から内陸部に繋がっていく商業路になり、国道として整備もされているが、古くは太平洋側から何本も飯田、塩尻方面への道筋が天竜川周辺に蜘蛛の巣のように道が走っていたことは否定できない。そのことは、現在の新城市四谷(かつての鳳来町四谷)のヨラキ峠の石仏などから、太平洋側から内陸部に、且つ内陸部から太平洋側とを結ぶ重要な道筋であったことを想像させてくれる。軍事的にも武田信玄らが、上洛を企て、進んできた道で有ったことを考えると戦国時代以前から続く道筋と容易に理解できる。この他にも霜月の神楽に関わる言い伝えの中に、都(京都)や伊勢、諏訪との関わりが示されることから人々の交通の実態を覗うことが出来る。

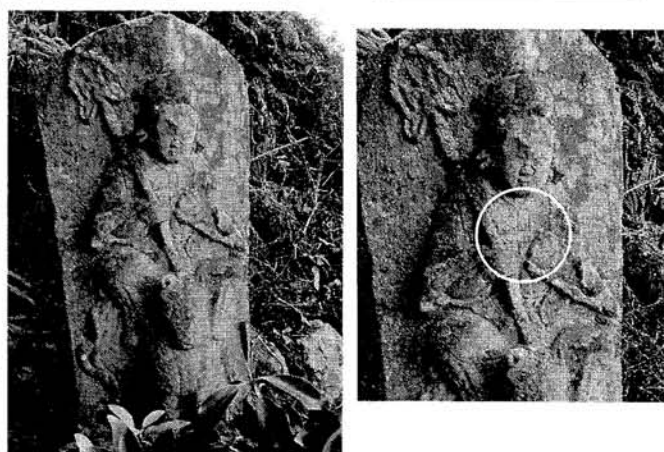
さて、著者が注目するのは『東栄の石仏』で、特殊墓碑に分類される愛知県東栄町の石造文化財を中心として

るものである。先に示したように東栄町という特殊墓石が松代、追分の宿で「キリシタンのもの」と云う伝承を持つ墓石と形状的に大変類似しているのである。ただ、その書物では「キリシタンの墓地」という伝承があるとしか伝えていない。また、その中に何があるのかの記述も見ることが出来なかった。北設楽の方では、このようなキリシタンにまつわる伝承をこれまで耳にしたことはない。だが、別所街道を通じて伊那に、あるいは中仙道に向かえばそこには大嶽や奈良井の宿があり、「マリア観音」「マリア地蔵」と呼ばれるものが存在していることは、すでに多くのところで指摘され、写真などでも紹介されている。だが、飯田街道と山一つ挟んだ新野、豊根、設楽、東栄方面には「隠れキリシタン」に関わる痕跡が一見ないように見える。これまで、筆者は花祭りの関係から東栄、豊根の石仏に関心をもち、花祭りに関連する石仏を探してみたのだが、それに関わる仏を見ることは出来なかった。地域的特性なのか地蔵と、聖観音、馬頭観音、庚申、役行者は多かった。もっとも、馬頭観音は中馬街道と並んで多いことは古の輸送手段が馬だったことを考慮すれば明らかである。そのことは稲武から旭町にかけては(現在は豊田市)「円通山 小馬寺」(天台宗から妙心寺派になったという)、そして設楽町には田峰に「谷高山 高勝寺」(現在は曹洞宗)があり、牛馬、あるいは家畜の守護、繁殖などを願う信者を集めたと紹介されている。だが、そのような石仏などの持ち物に違和感を感じ、調べた結果はこれまでの拙論、「石仏幻想の路——三信遠にキリシタン文化を探して——」で述べた。ただ、その段階でも北設楽郡界隈にキリシタンの文化的要素が存在するとは些かも思っていなかった。中仙道方面で云われる、いわゆるマリア観音、マリア地蔵も地域的特性の一つと考えていたのだが、交通路いわゆる商業的通路として捉えた時、義経もこの中部山岳を抜けて奥州へと入ったと伝えられることから北設楽界隈は知られざる交通の要衝であった事は否定できない事になる。ただ、路は一本だけとは限らな

い。現在の別所街道も複数あった中の一本が今日の姿として残っている事も忘れてはならない。

2 特殊石造物から考える

キリシタン伝承が残っていない東栄町での石仏については、すでに触れた。この北設楽地区ではキリシタンに関わる話はないことになっている。だが、問題になるのは石仏の錫杖などの中に浮かぶ十字架である。このような意匠が多いことはただの偶然として処理できるものではないと考えるべきであろう。



図=④
浜松市浜北区大平寶幢寺境内の馬頭観音
胸元に十字架

豊橋方面から内陸部に向かう道筋は豊川に沿って進む選択肢もあり、さらに天竜川に沿う方法もある。筆者は、浜松市浜北区大平にある寶幢寺で興味深い馬頭観音を見ている。馬に乗っている馬頭観音像だが、胸元には十字架を見ることができ、さらに、手にした錫杖にも

十字架を見ることが出来るものである。この場所は、山一つ西側に越えると豊川に沿う事になるのだが、北に向うと浜川に繋がる路となっている。たぶん、浜川近辺から浦川に、そして佐久間に繋がるのであろう。筆者がこれまで十字架の存在を確認してきたものは、基本的に地蔵であり、十一面観音であったが、馬頭観音となると意味が大きく変化することになる。つまり、地蔵および十一面観音では、定着性を暗示して来るからである。それに対して、馬頭観音では馬に関わりを持ち、ある地域から異なる他の地域への移動を前提としていたこと示すことになる。だからこそ、人々の移動、交渉をこれら石仏から見取れることになる。

北設楽郡界隈では馬頭観音は多い。東栄町は、そういう意味では佐久間にも抜けることができ、また豊根、津具、設楽、足助、稲武にも連なる興味深い位置を占めていることになる。そのような地理的特性が東栄町にあることを意識しながら石仏類を見ていくと東栄町の異なる一面を覗くことができる。すでに触れているが『東栄の石仏』では、特殊石造物のことが意識されていた。そのことは図①③さらに図②②（前掲書―では図129）にも同じく園、足込の墓石として取り上げられている。他には、古戸の五輪塔に並んでいるもの（前掲書 図―56）を見ることができ、それについては、『東栄の石仏』では説明はなされていない。少しわかりにくいのが、図②④、図②②の窓の形に注目しておきたい。それは、桃型（あるいはハートの形状になっている）窓の形である。他にも社（ヤシロ）形式の石造物を見ることができ（前掲書 図111）、それぞれ山の神あるいはスサノヲ社と分類されていて、構造的に前面に柱がついていることから違いは明白に見取れる。ここに特殊石造物との間の違いを考えていたのだが、いろいろと調べた結果、基礎部に柱を支える四角い穴を持ち、内部に石仏などを確認出来たことから、両者には基本的には違いがないと意識

するようになった。社型に変化させた理由は、「山の神」あるいは「水の神」「金山」と言い訳することが可能であったからではなかったか。

さらに、この種の社型のものにもハート型、三つの穴などの模様を持つものが少なからず見受けられるのである。繰り返すことになるが図Ⅱ②及び図Ⅱ③には桃の型をした（ハート型）窓を見ることができ

る。あるいは図Ⅱ①のように長方形三つの組み合わせによる顔のような図柄を見て取ることもできる。しかし、図Ⅱ②、③に示したものは「ハート型」の構造を見ることは出来ない。ただ、図Ⅱ③の追分宿のものには「十字」の構造を見ることが出来る。しかも、四つの窓、六つの窓の構造は一見すぐには「十字架」を見ることは困難だが、眼が慣れれば一つの十字架、あるいは二つの十字架が隠されている事につくのである。さらに三つの穴、あるいは二つの窓と入り口は、合わせると「三」になり、三位一体の姿を出現させていると見て取れるのである。だが、問題はこれをどこまで、墓石として受け入れることが出来るかと言うことになる。周辺にある他の墓石との違いは明白であり、一般の墓石とは全く異質であることはいうまでもない。



図=④『東栄の石仏』
(図-56 古戸)



図=⑤ 東栄の
石仏111図 三輪
スサノヲ社

3 特殊石造物の中

古戸の石造群の中にもこの種の家型、あるいは社型ともいふべき厨子型（内に石仏などが納められていることから）の特殊石造物が三基ある。蓋（？前面）が壊れているため、中を容易に見ることが出来るものもある一方で、窓からしか中をうかがうことの出来ないものもある。そして、中に何も確認できないものもあり、それぞれ一基を見ることが出来る。そういう理由から、古戸では特殊墓石（？、と言っていいのかどうかは、疑問があるが）の中に納められていたものが、石仏であった可能性を示している。つまり、古戸の事例では、図Ⅱ⑥であるが、そこには双体仏が納められていたのである。同じ砂岩質の石に二体（30×18cm）彫られている。風化が激しいので手の構造などは解りがたいところがあるが、左のものは合掌している。そして、気持的に一回り向かって右のものが細く彫られていることは注目すべきであろう。また蓋とおぼしきものは壊れてはいるが、桃（ハート）型の図匠を見ることが出来る。この意匠は目を引くものである。さらに、引用した図Ⅱ⑤を除き構造物の手前側には柱が存在しない。だが、それも基礎構造があるかどうかによって変わってくると考えられる。つまり、図Ⅱ④、⑥と比較して見ると、基礎の構造物の張り出し部分に明白な違いが存在することになる。だが、図Ⅱ⑥の石の厨子が元々どのような形であったのかは分からない。だが、石の厨子をなくしたのではなからうかと考えることの出来る双体仏が古戸にはいくつも見ることが出来る



図=⑥ 東栄町古戸
の卵塔場の特殊石造
34×15

考える。それは双体仏？というよりは男神と女神に見なされることで道祖神へと変容しているようである。古戸では、道祖神（道陸神）と説明された。

古戸の特殊石造物は、前面の特徴的な窓あるいは戸口、内部に石仏を持つことを示してくれた。問題となるのは、この石造物の窓などの意匠である。円形、桃型（ハート型）、長方形あるいは四角形の単独のものを見ることが出来るだけでなく、それらが組み合わせられているものもあり、意匠は一定しない。だが、思想性は十分に見て取れることは出来る。中が空洞のものが多く、石板、木板、丸石、石仏、石塔などの存在が確認できている。なかには図⑥のように内部を覗わせるものもあり、さらに石の外郭のなくなったものではないか、と窺うことの出来る図⑦

⑦の双体仏もある。合掌している姿から地蔵と、そして何かを持っているとみるからなのか、観音と見立てるべきか疑問は多い。はた



図=⑦ 古戸、石の
の厨子のな、くはない
たものではないかと思
慮するもの。
25×11

して、地蔵と観音の組み合わせという双体仏は、地域的特性なのだろうか。あるいは、道祖神と見立てるべきか問題である。

古戸以外の地区にも同様の特殊石造を見ることは出来るがその中に納められているものについては、基本的に「石仏状のもの」としか言えない（なぜならば、中を開けてみる事が出来なかったからである）。だが、映像などから判断する限り中に入っているものが、石仏であると言ったことが古戸の事例から裏付けられて来ると言える。だが、一つづつ彫られたものもあれば、一つの石に二体が彫られているものなど、なかなか状況によって判明できないものが多い。これまでの調査の過

程では中にリング状に加工されたような石を見ることも出来たし、板状のものの存在も確認できている（戒名、もしくは墓碑であった可能性もあるが、文字は消えていて読めなかった）。図⑦のものは、一体型の石仏であるが、何らかの理由で家型の厨子を失ってしまったと伺わせるものもある。これら図⑥、⑦の一体型石造を仏教的ではないと理解するならば、福音書に見るシメオンの話を彷彿とさせてくる。このルカの福音の話はすでに触れているが、概略を繰り返しておきたい。

その理由は地域では道祖神に分類されている双体仏に対して別の理解の仕方が可能になると考えているからである。さらにこの双体仏の問題は東栄町だけの問題ではなく、後に『会津のキリシタン』などでも触れるが、キリシタン問題を考える上で、重要な意味を有すると考えるからである。仮に、道祖神としてみた場合その思想的背景を男女和合、家内安全の視点で捉えきることが出来るのかがポイントとなる。安曇野の道祖神、松江近辺、淀江に見ることの出来るような幸神など男女二体の姿をことごとく道祖神的な見方で分類するとすればあまりにも浅く感じてしまえてならない。道祖神の背景に隠れキリシタンの思想的背景は存在しないだろうか、そう考えたとき、その分布の広さは全く異質の世界を示して来る。



図=⑧ 布川字屋敷の屋敷墓風景手間の家型の中に石仏が入っている。奥の小高いところに「天神」と彫られた石の構造物を納めた祠がある。



図=⑨ 布川の事例 (67×51) 正面には指を引っかけることの出来る程度の穴。中には石仏が二体 (各23×11) 左は合掌、右は何かを抱えているか？

山内強氏は、その著『会津のキリシタン』の中で下郷町中妻と昭和村喰丸の墓碑の写真を示されこれら墓碑の中には二体の石造の存在を指摘され、地蔵と観音に擬せられてはいるが、ヨゼフとマリヤ、あるいはドウロク様 (道祖神) とも称

筆者は図⑥ (前掲書においては図13) および図⑦を「エルサレムの神殿に幼子イエスを伴うマリヤとヨセフ」に見立ててみた。観音と地蔵が一つの石の中で組み合わされている事も珍しいかもしれない。だが、「レビ記12・1-8」には子供が生まれて40日後 (産後の浄めの期間とされている) に生まれたイエスを神殿に連れて行ったとある。ここには改めての子授けの構図を見ることを可能とする。さらに、古戸に限らず特殊石造物の中にこのような双体仏が置かれていたと考察することが許されるならば、特殊石造物はある意味で石の厨子であるのかもしれない。そして、厨子を失った双体仏は、かつての信仰の伝承を失ったことから道祖神にその姿を変容させられて行ったこともあり得るであろう。

ここまで書いてきて興味深い書籍に出会った。それは『会津のキリシタン』であり、『会津キリシタン研究』である。いうなれば現在の福島県であるが、この会津は江戸時代前期に、高遠藩との関わりが浮かび上がってくる。ここでは、そのことには触れないでおくが伊那高遠での時代との関わりが伺えることになる。

古戸の他の特殊石造物を見る限り、その中に石仏があることは、窓からのぞいてみるだけでも解る。だが、観音と地蔵の組み合わせか否かは扉を開けない限り分からない。中に何が納められているかについては今後の課題としても、先に触れた布川地区での厨子の中を拝見する機会はとても貴重で

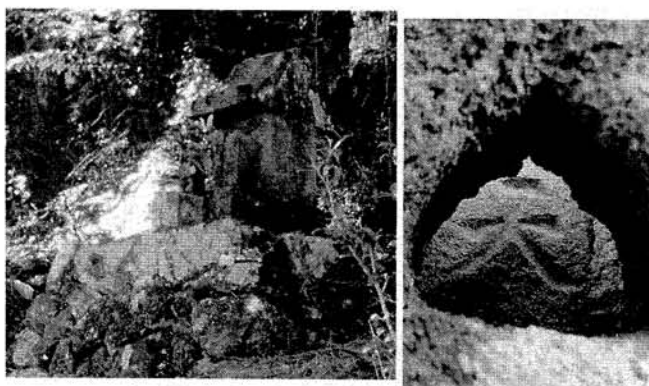


図=⑩ 『会津のキリシタン』より左が中妻、右が喰丸中に二体の石造があり阿弥陀と観音と称されているとするが、マリヤとヨゼフと説かれる人もあるとしている。



会った。さらにこの土地は字名を「屋敷」といい、その傍らの字は「上平（うへだいら）」と呼ばれ、明治の頃には「林泉寺」と称される寺があったという（布川 尾林良隆氏に案内され、説明を聞いた）。筆者は、この字の呼び方に興味を持っている。つまり、上平とは うへだいらかみだいら と言葉を掛け合せているのではなかったか。

「屋敷」の屋敷墓 図⑧⑨は 石の扉を開けると中に石仏が二体ある。風化しているが一体は合掌し、もう一体は両手が胸の前に来ているのが見える。子共を抱えている形であったのかも知れない。それは風化が激しいので何とも言えない。この石仏二体の話は、山内氏の記述と符合する。



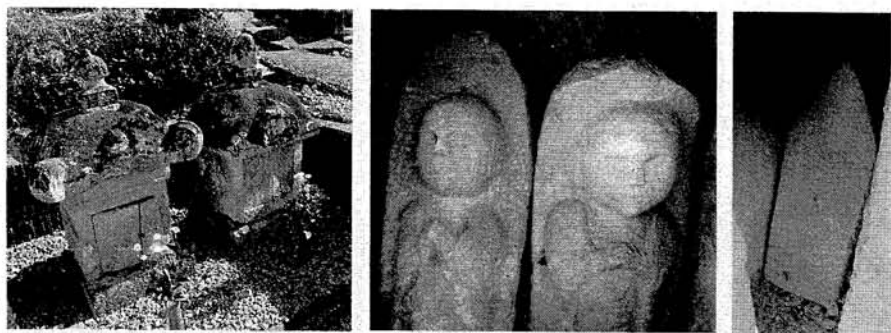
図=10、図=⑧の奥に小高く設置されている。窓より中をのぞける（写真は上の屋根をずらしたもの）「天」の字の下には「神」が見えた。

この布川地区の屋敷墓より5メートルほど左上の方に社型の石造物があった。先の二体の石仏を納めたものよりは一段と高いところに位置している。形状から山の神あるいは地の神がまつられているのではないかと思慮したのだが、ただ、柱と屋根の位置が合わないように見える。中にはリング状に加工された石があり、それには「天神」と記されていた。この「天神」という表記は興味深い。なぜならば「山の神」あ

るいは「水神」であってもおかしくはなく、この地区では花祭りが執り行われることを組み合わせると「金山」であっても良いことになり得る。厨子状の中はコンクリートで固められていて、石そのものを動かすことは出来なかったが。他の屋敷墓よりも高い位置に、しっかりと誂えられていることから見て特別なものであったことは覗える。しかも、中の石に「天神」という文字が彫られていて、他の石造物より位置が高く設定されていることに意図的な意味があると理解したい。しかも、ここで云う「天神」は菅原道真公ではないことは明白である。

4 特殊石造物の分布

東栄町地内では、寺の墓地以外にも共同墓地がある。本郷で共同墓地の存在を知り案内していただいた。場所は、本郷の諏訪南宮社の西にあり、「花祭り会館」の近くである。そこでの特殊石造物は十一基を数えた。いくつかのものには中に石仏が納められていることが確認できた。窓から覗ける範囲で見ても、個々の石仏であったり、板に文字の書かれている墓碑、そしてこの映像に見るような舟形の何も



図=11. 本郷地区の共同墓地内部の双体仏（左）と何も彫られていない舟形の石造見えた。

彫られていない石像など多様性に富んでいる。だが、年代は明白にすることが困難である。それは、石の構造物に年代などが彫られていないことによる。

ただ、キリシタンの伝承があり、キリシタンであったという仮定を前提にして考えるならば伊那谷の光前寺の赤穂11騎の墓石が手がかりになるかも知れない。この光前寺は、長野県駒ヶ根市にある天台宗の別格本山の寺院である。山号は宝積山（ほうしゃくさん）。院号は無動院。天台宗信濃五山のひとつという。また、霊犬早太郎説話でも知られている。寺のリーフレットには出てこないが、早太郎のお墓と称されている後方に11基の家型墓石がある。

この家型墓石は、『東栄の石仏』で云うところの特殊石造に分類することができる。だが、これによって、この種の石造物の出現の年代を比定することが出来ることになる。光前寺の「上穂11騎」とは、大坂夏の陣に地域の勢力関係から大阪方に加勢し、討ち死にしたと伝えられているものの違ひのことである。元和二年五月、夏の陣が終わった翌年には幕府からの命令で大阪方に加勢した11名の名前が書き上げられたとある。光前寺でこれら墓石を確認した際には中に



図=⑫ 駒ヶ根市内光前寺境内にある赤穂11騎の墓石の一部。大坂夏の陣（元和元年1615）で真田幸村とともに討ち死にした伊那谷の11人。

何も見ることは出来なかった。しかし、窓の意匠は基本的に同じ、つまり、十字架、ハート、四角形、長方形の組み合わせである。とくに十字架の図柄は四角を四つ組み合わせたり、巧みな工夫がなされている。ただ、赤穂11騎がキリシタンであったのかどうかの裏付けはとれていない。

ところで、ハート型の意匠は、一般には寺院などの切り妻の屋根の合わさった部分の妻の飾りに「懸魚」を見ることが出来、そこに「ハート型」の模様を見ることが出来る。この他にも神社の外壁などの釘隠しの飾り等に、これらは「猪の眼」と呼ばれる図柄とされている。それには火伏の呪術的意味が込められているとされる。神社などの場合は別としても、このような石造物においては「火伏」の呪術は必要ではないことになる。石造物に付されているこのような図柄は別の意図を有していると考えるべきであろう。

愛知県北設楽郡から一挙に伊那谷にまで話を広げてきてしまったが、歴史的・地理的背景がそこには存在する。伊那地方でキリシタンに絡む石仏などが多いと思慮できる背景には京極高知、マリア親子^⑪の存在が大きく関わってくることになる。高知は文禄二年に飯田城主となり慶長五年（1591～1600）に保科正光が高遠城に入るまで、自らもキリシタンとして伊那地方に関わっていたと言う歴史的背景がある。高遠藩初代から二代政之については、飯田藩が天領となっていた過程には隠された問題があるかも知れない。とくに京極高知、マリア親子の問題は宣教師が高遠に入っていたとされている。彼らが、そこで何を伝えたかは不明としても江戸城築城に絡んで多くの石工達が集団的に高遠あるいは、伊那地方から移住し、江戸近辺に定住していったことが『高遠の石仏』^⑬からうかがうことが出来る。とくに守屋貞治（モリヤサダジ）（1765～1833）は江戸時代後期に活躍し、愛知県の名倉高

愛知県東栄町の石造文化財を中心として

原にもその痕跡を残している。高遠の石工として活躍できた背景には京極家の問題があるのかも知れない。駒ヶ根市の桃源院の参道に並ぶ石造には異邦人(図13)を偲ばせる趣がある。ただ石工達の問題は今後の課題としておきたい。しかし隠れキリシタンの問題は様々な方面からの考察が必要だと云うことを確認しておきたい。すでに石造の多くは、仏教的な角度からしか見られていない側面が強い。

5 今後の課題

ここでは、隠れキリシタンが愛知県北設楽郡界隈に存在していたという前提に立って、石造などを見てきてはいないことを確認しておきたい。ただ、地域に残る様々な文化的痕跡を精査してくると仏教的とは云えない文化的痕跡に気がついたことから、東栄町界隈の石造文化財を再検討してきた、その結果から考えると文化的、商業的に愛知県の北設楽界隈が、信州、つまり下伊那、あるいは上伊那と密接な関わりを有していたことが覗えると云えるのである。歴史的には文禄二年(1593)信濃飯田城主と

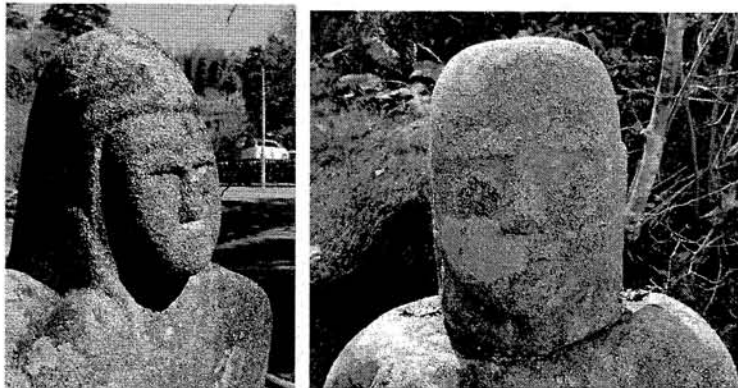


図-13 駒ヶ根市桃源院参道にある石像2体。顔には十字架を見ることが出来るが、貞治と比較すると粗さが残ると言える。

なった京極高知、マリアの動静、高知は飯田で受洗したと云われ、領内でのキリシタンの布教が認められていたとされる。しかし、関ヶ原の合戦、大坂夏の陣などを背景に、豊臣方につくか、徳川方かで伊那谷は揺れた。とくに、秀吉のキリシタン追放という問題も絡んで、天竜川という水系と中馬街道、三州街道、別所街道の商業路の問題から見ると大きな問題が隠れていることは明白となる。

これまで著者は木曾川流域(駒ヶ根、伊那など)の石仏などから東三河および遠州地方の石仏から隠れキリシタンの痕跡を探る手がかりを求めてきた。きっかけは本学『言語・文学・文化』①に記した、牛伏寺の子安地蔵を始めとする一連のマリア観音、マリア地蔵と称される木曾川沿いに散見する石仏との出会いであった。しかし、なぜ木曾川に沿ってこのような石仏が存在するのかと言う疑問はなかなか解けなかった。だが、中仙道、木曾路という街道を意識したときに、ようやく人の流れ、商品の流れからキリシタンの痕跡が木曾川流域に散見できることが理解できるようになった。もちろん集団で移動できるわけではない。人々が弾圧を逃れるために密かに様々な工夫を凝らしていたのではなかったと考えたい。そのような中で、信仰を同じくするものを守り、手助けしたいという願望が芽生えていても不思議ではない。信仰を一つにするもの同士ならば理解し合える象徴を道ばたなどに置くことによって、一般人の眼に見えないところで助け合いがなされていたと考えてみたい。それが、寺の外などに置かれていた子安観音(マリア観音)やマリア地蔵であったのではなかったか。そこに関わってくるのが木曾路であれば、不思議なことに臨済宗系の寺院が多い(もちろん時代の流れの中で曹洞宗になったり、浄土真宗になっていたりする所もあるが)。それは、キリシタンに関わるマリア地蔵、マリア観音などの遺構からも指摘できる。だが、ここでは飯田界隈から南に下る別所街道の方にもキリシタンに関わる遺構が多々存在することを

指摘しておきたい。飯田界限から、北設楽郡界限の北部では、まだ十分に資料は集まっていないのだが、山を越えてさらに南に下った東栄町、鳳来町界限では今後のさらなる調査によってさらなる成果が現れることを期待したい。

註

- (1) 『東栄の石仏(いしばとけ)』東栄町文化財審議会石仏編集委員会 昭和54(1979)年
- (2) 『信濃のキリシタン研究』長野カトリック教会文化部キリシタン研究会編 昭和35(1960)年 45、47頁
- (3) 拙論a)「石仏幻想の路——三信遠にキリシタン文化を探して——」『言語・文学・文化』第13号(通算72号) 東海学園大学 平成26年(2014) b)「石仏に見る隠された背景——石仏のイコノロジー——」『東海仏教』第六十輯 東海印度学仏教学会平成27年(2015) c)「石の仏に見る隠された顔——石仏のイコノロジー——」『言語・文学・文化』東海学園 平成27年(2015)
- (4) 『東栄の石仏』75頁に、園、足込「丑十一月林江禅門真音禅尼戌二月」と彫られているとし、その祠を金山様と見なしている。58×30センチ。ここでは図11
- (5) 拙論「石仏に見る隠された背景——石仏にイコノロジー——」『東海仏教』第六十輯平成27年51〜53頁
- (6) 山内強 『会津のキリシタン』風林社 昭和59年
小堀千明 『会津キリシタン研究(Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ)』歴史春秋出版 2004年。
- (7) 山内強 前掲書 364c。山内氏は迫害が激しくなると十字のついたものは皆御法度となるので、それに替わる観音や地藏にそのイメージを求め部分的に工作したといわれていると記し、(イ)、十字印または十字模様のついたもの。(ロ)、ハト、ヘビ、魚等動物の

愛知県東栄町の石造文化財を中心として

- 印。(イ)、十二の星
あるいは一から十までの印。(ロ)、天地の模様、または葡萄唐草模様。(ホ)、三日月に乗っている女神。(ハ)、子供と太陽。(ト)、変形文字、又は一と三の印。と記し、これに裏づけとなる伝説又は伝承の有無によって判断することになるが、断定することは難しいとされている。
- (8) 山内強 前掲書97頁
 - (9) 村澤吟治郎編 『赤須・上穂 旧記録鈔』上伊那史談会 昭和14年(1939)
 - (10) 前掲書44頁。だが、それに対するお咎めなどの記述はこの書にはない。このことから、これら墓石の設置が元和2年から3回忌あたりの元和二(1615)から元和五(1618)年の範囲のものと思慮したい。(つまり)、福島正則、保科正之の問題とも密接に関わってこよう。
 - (11) 『図説・上伊那の歴史(上)』(長野県の歴史シリーズ(4)) 向山雅重監修 郷土出版社昭和63年の100頁によれば、「切支丹大名記」に文禄元年(1592) 飯田城主京極高知の勧めで高遠には宣教師が入っており、高知も高遠で受洗したとされている。伊那地方はその当時からかなりの信者が居たと考えられているが記録はほとんどない。だが、『図説・上伊那の歴史』には「上伊那郡誌」(歴史編)を引用しながら江戸時代に高遠藩から二名のキリシタンについて記述している。一名は侍であったらしいが細かい記述はなく、もう一人は加賀出身の小間物問屋の四郎左右衛門とされ、寛



図14 本学 村主千賀氏提供による。東京杉並区 妙法寺の灯籠。十字模様と葡萄

愛知県東栄町の石造文化財を中心として

永二十年(998)に処刑されている。さらに、その息子は蔵沢寺の住職の弟子となり、直指人にまでなったとされているが、女犯の罪を理由に処刑されている。

(12)

長野県上伊那郡高遠町 高遠町誌編纂委員会編
付 石造物『昭和59年(1984) 115頁

『高遠の石仏



特殊石造物(家型墓石)の確認できている地点(2015年末)